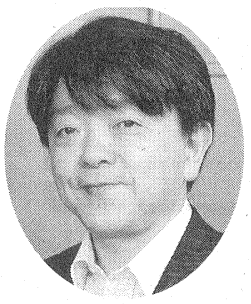
私見創見 Thursday

問われる親の信念と覚悟

偽りの成功体験

畑山　篤



はたやま・あつし
1960年、八戸市生まれ。明治学院大卒。志学塾を運営しながら、全国各地で講演。「勉強部活」を提唱、放課後学習支援などに関与する。全国学習塾協会理事。

志学塾塾長

今年も新緑の季節が訪れ、中高生は勉強も部活動も本格的になってきた。特に運動部は6月の高総体、中総体まで、夜遅くまで練習に励む日々が続く。

確かに、私たち親の世代も勉強と部活の両立に挑んだものだ。しかし、〝ゆとり教育世代〟の子を持つ親は「どちらかに専念させたい」と願うケースが少なくない。

例年この時期になると、「総体まで部活に専念させたい」と休塾の電話が入る。丁寧に家庭での状況を聞くと、実は帰宅すると勉強もしないで寝てしまう。無理に起こして塾に行かせるのは、かわいそうだと言う。

大会の前日には「明日の試合の準備があるので、今日は休みたいと言っています」「今日はとてもじゃないが行けないと言っていますので…」「応援で疲れたようです」などの電話が続く。

このような場合は、「本当に疲れていますか?」と子の〝口実〟に親が気づくように応える。電話口の向こうで「ハッ」とした空気が流れることが多い。

ある日、中3女子の母親から「今日は休ませます」と電話が入った。「どうかしましたか?」と聞くと、「どうもしていないんですが、おなかが痛いと…」と。私は「先日の模試の結果にショックを受けているのでは?」と当たりをつけて切り出した。「はい。ショックのようで…」。

「お母さんの気持ちは分かります。しかし、親子で事実に向き合わないと疑心暗鬼になり、乗り越えられなくなります。下痢でどうしようもないなら別ですが…。痛み止めでも飲ませ、少し休んだらよこしてください」と助言した。すると、明るい声で「分かりました。ご飯食べさせて、少しだけ遅れますが行かせます!」。「そうですね。ご飯が入るなら大丈夫。お待ちしております」と励ました。

程なくして登塾した女子に「模試の結果は残念。取り組みの改善点は?」と話した。「かいぜん?…」。「そう改善点だ。テストの1週間前に戻れるなら、何をするべきだったかな?」。「うーん、勉強…。時間の使い方…」。「では、何かが邪魔した?または足りなかった?」と続けた。その子はしばらく考えて「うーん、余裕?」と答え、ほほ笑んだ。間髪入れず「えっ、週休二日でいつもゴロゴロしていて、まだ余裕が欲しい?」と本気で聞いた。すると「あ、言ってみただけです。えーと、試験範囲を繰り返す」。「うん、そうだ!では、睡魔に打ち勝って取り組むためには?」。「はい、細切れに先にやる!」。「よし!席について頑張れ」と促すと、部活の疲れもどこへやら、はつらつと午後10時まで取り組んで帰っていった。

最近、子どもの反抗期が軽くなってきている気がする。中学生になっても高校生になっても素直で、ツッパリはもちろん、キレたり、グレたりする子も見当たらなくなった。

子はある日、軽い気持ちでやれない口実を並べてみた。すると、親は「無理はするな」と勉強も部活も手伝いも先延ばしにしてくれた。まるで親が子の「転ばぬ先のつえ」のように…。

この幼い頃より積み重ねた「偽りの成功体験」は、やるべきことをやらなくてもいい時間を積み重ね、やがて親子の性質を決める。子育てで子を甘やかすのは、親が誰かに甘えたいからかもしれない。

反抗期はあって当たり前と意識し、親子でぶつかり合うことを覚悟して、親の信念や経験を伝えることが、子の意欲を伸ばすためには不可欠だと思う。子と一緒にいる時間が楽しい、幸せだと思うのは当たり前の親心。一緒にいない時間、やがて一緒にいられなくなる時間も幸せであるために、親は子といる時間を意識したいものだ。

「の品」救え

使い奉仕活動

熊本地震の被災地では倒壊家屋に埋もれた「思い出の品」を見つけ出そうと、全国の建設業者が重機を使ったボランティア活動を始めている。関係者の思いに応えるため、受け入れ側も万全の環境を整えている。

呼び掛けたのは、岐阜県高山市の災害ボランティア団体「Vネットぎふ」代表川上哲也さん(52)。今回の地震後、「本格的な解体作業が始まると、全て撤去されてしまうことが多い」と懸念。「思い出」を持ち主に返してあげたいと、東日本大震災や関東・東

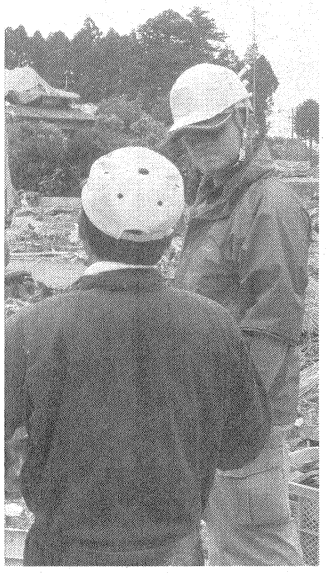
熊本・倒壊現場

北豪雨などで復旧作業した建

立てたい」「保険が出なくても構わない」との熱い思いに打たれ、川上さんらの活動を認めた。

1階部分がつぶれた川元博美さん(58)宅。社協のビブスを着た作業員らが手慣れた様子でショベルカーやチェーンソーを操ると、小さな貯金箱が見つかった。娘が幼い頃から大切にしていた品。「やっと見つけた。今日で捜し物は終わりだな」。川元さんは目に涙を浮かべながらつぶやく。

日記やアルバム、結婚記念のネックレス…。これまで200人以上が携わり、いくつもの「思い出」を見つけた。川上さんは「家族の歴史は一度失うと取り戻せない。それだけは守ってあげたい」と支援を続ける決意を語った。



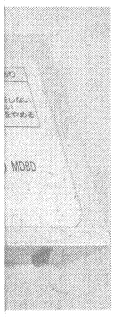
跡で、重機を使った川上哲也さん（右）
8日、熊本県西原村

家電重大事故

リコール対象品100件

15年度 9割火災、死者も

消費者庁は18日、生活用品や家電などを使って起きた重大事故の報告が2015年度は885件寄せられ、うち100件はリコール対象になっている製品が絡む事故だったとして注意を呼び掛けた。



100件中92件は火災を伴い、死亡事故は1件あった。消費者庁は「身の回りの製品がリコール対象品でないかを、いま一度確認してほしい。使い続けると事故を引き起こす危険がある」としている。

100件の内訳は40事業者の27品目の事故。品目別では、ノートパソコン用バどは07年度から、家電や燃焼器具などの製品を使って起きた死亡、重傷、一酸化炭素中毒、火災を伴う重大事故の報告を国内全てのメーカーと輸入販売事業者に義務付けている。重大事故の報告数は08年度の1412件をピークに減少傾向にあり、15年度の885件は過去最少。うちリコール対

回目で、仙台での開催は1991年以来、25年ぶり。

地域活性化に貢献した広告を表彰する鈴木三郎助地域キャンペーン大賞は、読者や賛同企業と共にポスター展など実践的な活動で、東日本大震災の復興を支援する「今できることプロジェクト」を実施した河北新報社に贈られた。

地域クリエイティブ大賞の最優秀賞は、岡山県新庄村によるテレビCM「あれから10数年、村の人口は減っていた。」に授与された。

大会は20日まで。19、20日は東日本大震災の被災地の見学などがある。